妹の死

原　重一
（三重大学教授）

原子爆弾がはじめて広島市民の頭上に投下されて、すでに二十年になるが、被爆のむごたらしさについては改めて申すまでもない。

その放射熱は、爆心地から一㌔以内の地域では人絹やスフの衣服や、不燃性物質をも瞬時に焼き尽くし、それとともに物凄い爆風が人の内臓を侵し、一瞬の閃光のために人の顔面は火ぶくれとなり、木造家屋は燃え上ってしまう。その上、不可視のガムマ線は、厚いコンクリートの壁を侵透して室内に火災を起し人体の血液細胞を破壊する。火傷を負うたものも、即死をまぬがれたものも応急治療を受けるすべもなく、呻き苦しみながら一、二日の後に相前後して死んで行ったのである。一面の焼野が原には、ビルの残骸と煙突が残るのみであった。

今日、原爆ドームとして残っている穹窿形の鉄骨は、似の島捕虜収容所にいたドイツ人技師の設計によるものである。この建造物は爆心地にあるが、広島市では最初の四階建てのビルで物産陳列館といった。元安川にのぞみ、美展などここで開かれ庭園の桜の花咲くころは、人出も多かった。私がアート・スミスの宙返り飛行をボートの上から仰ぎ見たのもこのあたりだった。

八月六日の神は眼を閉じる
　　鷲野蘭生

平和公園の原爆記念碑に刻まれている「ノー・モア・ヒロシマズ」の銘は、雑賀忠義氏の筆跡と聞いているが、これは単なる一国民の悲願ではなく、世界平和をねがう人類すべての叫びでなければならぬと思う。広島原爆機B29にはエノラ・ゲイと書き込まれてあったという。しかもこれはチベッツ大佐の母の名である。慈愛の象徴である母なる人の名を機名としたB29が、史上最初の原爆を人類の頭上に投下するとは。

私は原爆投下のあった翌七日夜、呉工廠の寮を発ち、ただ一人二十㌔の道を歩いて広島市内に入った。余燼の火は、生ぬるい夏の夜風に狐火のような紫・緑・青色の炎がもつれ合って生きもののようだった。私の家のある地区は、まだ火の海で近づき得なかったので夜の明けるのを待った。私の家は裏が空地をへだてて元安川の川岸に接していた。ここで二晩を明かした家族たちにあい、被爆の模様を聞いた、ところが妹が居ない、そして行先が分らぬという。原爆炸裂のとき、家内と三人の子どもは家の中にいて太陽の光を受けていなかったことと、家屋の下敷にならなかったことのために、火傷を負わないで助かったことがわかった。

私の家は九丁目の南詰めで、爆心地からは直線距離一㌔の線上にあり、町内の各家々からは一名または二名の死者が出ていた。一㌔に足らぬ八丁目に北では殆んど家屋の下敷となり焼死していた。私の家では戸、障子は明け放したままだったので、爆風は玄関先から庭先へ通り抜けるかに見えたが一瞬の閃光と同時に家屋は倒壊し、火は隣りから燃え移って来たのだった。畳がめくれてひとりでに動き出したという。家族たちが百㍍ばかり南の南大橋のたもとに退

避していると、強制疎開で取壊された家屋の跡片付けに狩り出されていた町内各班の当番の人たちが群をなして殺到して来た。いずれも身体に火傷をしており、飲み水を欲しがっていた。その人たちの中から、家内は「姉さん」と連呼する声を聞いた。後をふりかえると、顔面は火ぶくれとなって別人かと思われる私の妹を認めたのである。妹は水が飲みたいという、家内が鉄かぶとで、橋下の水を汲んで飲ませたのであるが、喉もやられているらしく、水は顔面にあふれてしまうありさまだった。そこへ衛生兵が来て、水を飲ませてはならぬという。衛生兵は被爆で火傷をした人たちを、行先きもいわずに連れ去っていった。家内は妹に私の背広の上衣を着せて見送ったのだった。

私は家族たちをつれて、爆心地から六キロ離れている学校の標本室へ引き揚げた。校舎は倒壊と焼失はまぬがれていたが、爆風の被害は甚だしかった。教室の黒板はずり落ち、窓枠は折れたまま吹き飛ばされ、窓ガラスの破片は散乱し天井板といわず腰板にまで突き刺さっていた。私は妹の収容先を一刻もはやく探し出そうと、日照りの道を東から西、北から南へと歩きつづけた。

警備担任司令官の布告によると、駅構内や橋畔、暁部隊や日赤など十八カ所に「負傷者収容中」とあった。道路わきには焼死体に鉄板がのせてあったり、赤く水脹れした死体が、仰向いたまま川面を流れていたり、河岸の雁木に水死体が漂着していたりした。夜になると運動場の外側の堤防に黒い人影が、三々五々動いては火葬の火が夜空を彩った。夕食の膳に河面をわたる風が人焼く臭いを運んで来た。ろうそくの火のゆらめきに人体模型の胴体から上が揺れるのを見た。標本棚の箱が爆風のため横倒しになっており、防腐剤の匂いが鼻をついた。

学校へ来てから三日目の昼ごろ私は電鉄会社の前を歩いていた。車庫の引込線上の架線は、切れたり斜めにぶら下っていた。電車は焼けて鉄骨のみを残していた。会社の事務室の壁に死亡者の名前が掲示してあった。妹の姓名は上段の初めの方にあって、隅の方に宇品船舶練習部と書かれていた。私は妹の最後の様子もきき、形見の遺品でもあればと御幸橋を渡った。橋上には幾本もホースが泥まみれになったまま放置されてあった。御幸橋から宇品方面にかけて家屋が焼失をまぬがれたのは、消防に挺身した人たちがあったからに違いなかった。

宇品船舶練習部に辿りついて、妹のことをきいたが、係りの人はぜんぜん知らない様子だった。係りの人はしばらく考え込んでから「いま、女の死体が三体あるが、調べて見ますか」といってくれた。いままで数多くの死体を見慣れてきた私も、女の死体ときいて、さすがにぎょっとして黙ってしまった。廊下には火傷をして夢遊病者のような格好の男が身体を横たえていた。係りの人は「御幸橋派出所へ行ってごらんなさい。もしかしたら、妹さんの検屍調書がとってあるかも知れませんから」といってくれた。この言葉に勇気を得て、私は同じ道を引返えした。御幸橋の欄干はそっくり川の底へ吹き飛ばされているのを見て、爆風の強さを改めて知った。派出所の警察官は、さっそく調書を見せてくれた。

頁を五、六枚めくったところに妹の名前があった。生年月日や身長、着衣などの記載事項は思い当

視

るふしばかりだった。妹はそのとき二十六才でまだ独身だった。中肉中背、着衣綿製パンツ。死亡時刻は八月七日午後八時と書かれてあった。私は複雑な思いでいっぱいだった、妹は刻々と死のせまる苦しい息の中から辛うじて自分の名前と生年月日だけを言って、ただ一人さびしく冥土へ旅立ったものと私は想像した。しかも火傷をして一日半の間しか生きていなかったとことになる。

私はまた一方では、死者や負傷者や避難所のごった返えす大困乱の中で、よくも妹の検屍調書がとれたものだと感動に近いものを覚えたのである。妹の死が確認されたので、私は妹の遺品が何か一つでも残してあればと思い、調書の報告かたがた再び宇品船舶練習部に足を運んだ。

係りの人は「遺品など何もない、屍体はしばらくも放置できないから、海をへだてた似の島へ運んで、他の多くの屍体と一緒に火葬したと聞いている」と答えてくれたに過ぎなかった。妹は遺骨も遺髪も何一つ残すこともできず死んでいった。二十年経った今日、妹の形見は写真数葉と小型の鋏一個しかない。昨年[illegible]月、原爆で死んだ市民も靖国神社に合祀されることになり、私の妹もその中に加えられた。私はこの文章を草するにあたって妹のことを書きすぎたように思う。

実は私の書き残したいことは他にあったのである。妹の死もさることながら、私が特にうれしく思いまた救われた気持ちになったのは、幾万の死者を目前に擁しながら、被爆の負傷者が手当の方法もなく次々に死んでいったなかで、検屍調書をとり得たということである。空前の非常の際にこれらの調書に携った警察官に対し、私は頭が下がる思いであったことをここに、くり返えし述べる次第である。

捜査の今昔

伊藤　清
（安芸郡安濃村長）

犯罪者が科学捜査の偉大な進歩に驚威を感じ、警察もまた、微妙な犯人の心理に驚嘆したという古い記憶を追想して捜査の今昔を対比してみたいと思う。

話は古い、大正十三年というからすでに四十二年も以前のことである。津市の中央川畔に市内でもまれにみる鉄筋四階のビルが建造され、その三階は相当高価な物品を販売する当時の百貨店であった。ところが暴風雨のある夜、近くの竹屋から十数本の太い大きな竹を盗み出し、これを束ね合せて梯子代用とし、外部から三階の硝子窓に立てかけ、これによじ登って窓を打破って侵入し、目ぼしい盗品を柳行李二つに詰め込み、麻縄で竹梯子を伝って下に降し何れにか逃走したという事件があった。この被害額は当時三千円といわれたから、現在ではおよそ三百万円にも必適するのではないかと思う。当時の捜査はいまから考えたらそれこそ幼稚極まるものであった。関東の大震災はちょうどこの前年の大正十二年であったことはいうまでもない。

そのころ本県から警視庁へいまは故人となられたが、ある警察官が鑑識研究のため一カ年の長期講習に出向し、これを終えて帰任し本部に勤めていた。

さっそく新らしい鑑識知能を持つ同君が犯行現場の捜査に当っ